## 川内・下田山塊・杉川本流（中退）

メンバー：中島（Ｌ）、熊倉（以上わらじの仲間）、三井（記録）
遡行日：１０年７月１７日～１８日

「杉川」というと僕には忘れられない出来事がある。
それは０１年の７月に会のメンバー４人（中島さんも入っていた。）で行った時の事。僕は側壁を登ってやばいＳＢ（スノーブリッジ）を越えようとしていたのだがそのＳＢが崩落し、それに巻き込まれて側壁から６．７ｍも転落して危うく大事故になるところだった。（年報４号に詳細記載）
その後行く機会がないままになっていたが今回「ワラジの仲間」の計画に僕が参加させてもらう形での再戦となった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

下山予定の光来出川の笠掘ダムで、今は奥只見の住人となっている熊倉氏と合流、そこに僕の車をデポして熊倉氏の車で杉川のスタートラインの「チャレンジランド杉川」に向かう。
「チャレンジランド杉川」の少し先が林道の終点で車はそこまで。
杉川は名にしおうヒルの生息地、さすがに日の当たる所にはいないが日陰をみるとあちらこちらで蠢いている。身支度を済ませ、杉川沿いの樹林の中の踏み跡を辿る。ヒルバスターを足回りに吹き付けて対策はしているが…。さすがに川内のヒル、そんな事ではヒルまない（！）。早速数匹がたかってくる。
３０分ほど行くと堰堤に出る。前回はそのままゼンマイ道を辿って行ったのだが廃道化が進みどうも藪が酷そう。で、ここから沢に入る事にする。沢に降りるとすぐゴルジュのトロ状の渓相となっている。いきなり水に浸かる事になるとは…。
最近、とみに濡れた時の耐性が低下していて、低体温症の初期みたいな感じになる事があり、極力濡れる事を避けているのだが。
長いトロで、できるだけ水流際をへツるようにして辿って行くが、胸まで浸かったり、ワンポイントで泳がなければならない箇所もあったりで、早々に全身濡れネズミとなる。このところ雨も降っていたし水量は多いようだし、思ったより水が冷たいのも気になる。
殆ど河原らしいところはなく延々とトロが続き、１時間半ほどで右岸に「逢塞川（大底川）」を迎える。
以前来た時はこの支流の先から入渓したのだが当然の事ながら沢通しでは時間がかかっている。
出合いの僅かな河原に上がって水漬けの身体を温めようとするも寒い。中島さんは平然としているが僕一人震えている。
中島さんは「皮下脂肪の差よ。」などといって笑っているがそんな事今言われてもねぇ…。
雨具の上下を着込み、少し落ち着いたところで再び水漬の苦行が再開される。屈曲した狭いゴルジュを首まで浸かりながら進んで行く。しばらく進むも左岸側にゼンマイ道が残されているハズで、沢から上がって取り付く。しかし古い遡行記録にはしるされて

はいようとも今、その道を利用する山人などはいないのだろう。それらしいものは見当たらず、潅木を掻き分けたり、縋ったりのあたり前の高巻きとなる。
時折視界が開け、うねうねとしたゴルジュを見下ろすのだがやはり、泡だって流れていて沢に降りても梃子摺りそうな事は予想される。それに不安定な天気で、薄日が差したかと思うと小雨がパラついたりで沢床に下りる気にはならない。
思うようにははかどらないもどかしさを抑えて、左岸の斜面を高巻き状態のまま進んでいく。
暫く行くと小さな枝沢の手前に一坪ほどの平坦な場所にでた。まるでその場所に到達するのを待っていたかのように急に雨脚が強まり、躊躇する間もなくそこをテン場にする事にしてタープを張る。
乾いたものに着替え、コンロで飲み物をつくれば人心地がついてのんびりする。
熊倉氏は余り口数の多い人ではないが只見での生活の一端などを聞かせてもらう。
夕食は熊倉氏が担当したのだが、味噌汁などジャコや干し椎茸などをいれてダシをとるところから始める手間のかかったものでこの辺り、「浦和ローマン」に所属していた人だな、と思う。

二日目の朝を迎える。天気はマズマズのよう。
テン場から昨日の続きの高巻きとなる。暫く辛抱して行くもこんな状況が続いていては面白くない。
上からゴルジュを覗き込むと幾らか落ち着いてきているようだ。ルンゼを横切るところからそのルンゼを下降して沢床に降りる。
流れに逆らって遡って行くが、間もなく少し通過に梃子摺りそうな淵となる。右岸側の急なルンゼを中島さんがロープを曳いて登るが、我々がフォローで登ると中島さんから意外な提案がでる。「もう戻りませんか。」
このまま進んだところで明日、笠掘ダムまで下れるところまで今日のうちに行く事は無理だと思う。となると本日行ったところを翌日また戻るだけ。それでは頑張って行ってもしようがない、と…。
これは僕も秘かに危惧していた事。熊倉氏も「やむをえないな」という表情。で、そこから下山という事になる。
沢通しに下るが、行きは梃子摺っても流れ下れば楽で早い。
車に戻り、着替えると途中温泉に寄ってさっぱりして、車を置いた笠掘ダムまで戻る。
ここで熊倉氏から「うちによって行きませんか。」とのお誘いがある。奥只見の生活を拝見させていただくのも興味深い。喜んでそのお誘いに乗る。
３時間ほど走っただろうか、熊倉宅に到着。山あいの、自宅裏には川が流れていて、いかにも…というロケーションで「ああ、いいなぁ…。」と思う。
自給自足を目指して米や味噌を作り、自宅廻りの畑で様々な野菜作りをしていて、自家製ワインの為のブドーが植えてあったりで、「毎日忙しいですよ。」と山仲間だった奥さんは微笑み

を見せて言った。
奥さんと、2匹の甲斐犬との暮らしで、今はその犬との散歩が楽しい、と言った熊倉氏の言葉が印象的だった。
余人には分からない大変な事もあるのだろうが、勿論隠遁などとは無縁の、自分の思うような暮らしを気負う事もなく、淡々と実践しているその生き様がすごいなと思う。
その日は熊倉宅に泊めて頂き、翌朝厚木に戻った。
またまた杉川は中退という事になってしまったのだが、色々記憶に残る山行だった。